

琉球大学学術リポジトリ

トゥバラーマに歌われた〈花〉について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2018-08-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前城, 淳子, Maeshiro, Junko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42248

トゥバラーマに歌われた〈花〉について

前城 淳子

八重山諸島に伝承されてきたトゥバラーマは、奄美・沖縄諸島の琉歌（ウタ）、宮古諸島のトーガニとともに、琉球の抒情歌謡を代表するものである。琉歌が基本八八六音の四句からなる定型であるのに対し、トゥバラーマは決まった音数律を持たない不定型の歌謡である。歌われる場面^一や地域によって節回しが異なるが^二一つの曲で複数の歌詞が歌われ、それぞれの歌詞の分量はほぼ一定している。そしてそれは琉歌の分量と大凡同じといってよ
いだろう。

胸ぬ 思いゆ	悶えたぎる胸中の苦しみをば
打ち明け しいさるばら	打ち明けて示す事が叶えたら
肝ぬ くりしやゆ	心中の煩悶を
取り出し みしらるば	取り出して見せられたら

〔八重山民謡誌〕一五一頁

右にあげたトゥバラーマは「胸の思いを打ち明けて知らせる」と「心の苦しさを取り出して見せる」という二つのことがらで並列され構成されている。「胸の思い」と「心の苦しき」、「打ち明けて知らせる」と「取り出して見せる」といった、類似の内容を反復する対句形式となっている。全てのトゥバラーマがこのような形式を取るわけではないが、このトゥバラーマのように、歌が一对句で構成されているものが多く見られること^三、全体を四句に分けることができるものがみられること^四などが、トゥバラーマの詩形の特徴としてあげられるだろう。

さまざまな場面で即興的に歌われたために、文字に記録されることなく消えていったものも多くあるであろう。また一方では現在も次々と新しいトゥバラーマが作られ歌われている。琉球の抒情歌謡の特徴を明らかにするためにも、トゥバラーマを広く採集する必要があるのだが、分析対象を比較的多くのトゥバラーマを収録している『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』^五（約三〇〇首収録）と石垣市文化協会編『とうばらーま歌集』^六（一五〇首収録）に限定して、トゥバラーマの表現論への足掛かりとしたい。

トゥバラーマには、月、星、太陽、雨、露、風、海、山、川、花、松、ヤラブ、鳥など、さまざまな自然の風物を取り上げられている。これら自然の風物がどのような心と関係づけられて歌われているのだろうか。そして、そのためにどのような方法が用いられているのだろうか。トゥバラーマに描かれた自然の風物の中から、今回は比較的用例の多い「花」を取り上げることにする。

トゥバラーマで歌われる「花」は、1植物の花それ自体を賛美するもの、2恋の事象と対比されたり、恋人や愛情、男女の関係の比喩として用いられているもの、3若さの比喩として用いられているもの、4盛んなさまをあらわすものに分けることができる。以下、この分類にしたがってトゥバラーマの「花」をみていくことにする。

1 植物の花

トウバラマで「花」が美的評価の対象として歌われているのは、一例のみである。次の歌は「朝夕水をかけて育てた花の香ばしさは肌身に染まる」と、花の香りの良さが歌われている。「朝夕水をかけて」と常に心を配って育てた大切な花であり、その花の香が素晴らしく、「肌身に染まる」ものであることが描かれている。自然の賛美といったテーマの新しさだけでなく、対句形式ではない線条的な詩形となっっていることも、このトウバラマが比較的新しいものであることを感じさせる。

2 あさゆ みじ かき

朝夕水をかけて

すだてーる ばなぬ

育てた花は

かざぬ かばさ

匂いの香ばしさは

はだみに すまる

肌身に染まる

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五三二頁〕

2 恋の花

自然の中にある「花」が描かれる場合、先の一例を除いては、自然の描写そのものが目的なのではなく、私の恋の心を具象化するために用いられている。歌の中で自然の花と人間の事象を並べ、共通の特徴を持つものとして関係づけることによって恋を描いている。また、愛しい人や初めての交情、男女の関係などを花に見立てて恋を描くのである。

①花と恋

次の歌では前半で「咲いた花は豊穰を待っている」と自然が描かれ、後半では「私は夜中のあなたを待っている」と人事が描かれている。主体に「花」と「わたし」、動作の対象に「豊穰」と「あなた」が、共通の特徴「待っている」と描くことで対比され、両者は共通の特徴を持つものとして認識される。花が豊かな実りを待つように、私は恋人を待っている。「豊穰」と「あなた」は、どちらも大きな喜びを与えるものとして、今か今かと待たれるものなのであろう。

65 さちやる はなや

咲いた花は

ゆがふどう まちうる

豊年を待っている

ばぬや ゆなかぬ

私は夜中の

さとうどう 待ちうる

あなたを待っている

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五三四頁

次の歌では前半で「庭の花は太陽と水が頼りだ」と自然が描かれ、後半では「私はあなたの愛情が頼りだ」と人事が描かれている。動作「頼る」は同じだが、主体が「庭の花」と「私」、動作の対象が「太陽と水」と「とうばらーま（貴男）」と異質な素材が並列され、対比されている。花を咲かせるためには太陽と水が欠かせないものであるように、私にとつてあなたの愛情は欠かせないものである。

みなかぬ ぱなーまーや

庭の花は

ていだとう みずいどう たゆりい

太陽と水が頼り

ばぬや とうばらーま
なさきどう たゆりい

私は貴男の
情こそ頼り（である）

『とうばらーま歌集』一一七頁

次の歌では「ユウナの花が風に揉まれている」ことと、「愛しい人がわたしに揉まれている」ことが対比されている。それによって、花が風に逆らうことなく揉まれているというイメージと、わたしの思うままになっている恋人の姿が重ねられる。愛しい人を「かぬしやま花」と花に見立てていることも、花のイメージを強くしている。

166 ゆうなぬ花や

ユウナの花は

風まま むまれ

風の（吹く）ままにもまれ

かぬしやま花や

愛しの花は

ばぬまま むみむまれ

私の（気持ちの）ままにもみまれてください

『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』五三九頁

次の歌では「草木の花は枝先に咲かせる」と「乙女の花は心に咲かせる」と二つのことがらが描かれている。動作「咲かせる」は同じだが、主体に「草木の花」と「みやらべの花」、動作が行われる場所は「枝先」と「心」のように異なるものが並べられ対比されている。玉城政美はこの歌について「華やかな乙女の時期を逃さず心に咲かせましよう、というもので、若さを謳歌している。」^七と述べている。「みやらび」は恋愛対象となるような若い娘のことであるから、若さを象徴するものとして捉えることもできる。しかし「みやらび」には恋のイメージがつき

まとう。「きいむに 咲かしようら」の「きいむ」が私の心を指しているとすると、私の心に乙女への恋愛感情が生じることを表しているだろう。

133

ふさきぬばな

草木の花は

ゆださきに さかし

枝先に咲かし

みやらびぬばなや

乙女の花は

きいむに 咲かしようら

心に咲かししよう

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五三八頁

次の歌は「花であってもすべての枝には咲かない」と「情がある枝を頼って咲く」と二つのことがらが描かれている。花がすべての枝には咲かないことと、花が枝を選んで咲くことは、同一の現象を異なる方法で描いているもので、同一の内容を反復していると言えるだろう。この歌では、直接的には植物の花を描くだけで人間の事象は描かれていない。しかし「はなやらばん（花であっても）」と程度の軽いものとして花を取り上げることで、それ以上のものでしての人事を想起させている。花でさえ情のある枝を頼って咲くのだから、ましてや人である私は情のある人を頼って関係を結ぶのだ、と。

117

はなやらばん

花であっても

ゆだかーずんが さかぬ

枝ごとには咲かない

なさきあるゆだどう

情けのある枝を

たゆり さちゆる

頼って咲く

次の歌では、前半で「季節の花は季節に合わせて咲いている」と自然の描写を行い、後半では「あなたとの縁は会って固めるのだ」と人事が描かれている。花が咲くのは季節に合ったからであり、そのように、二人の縁は会うことで強固なものになるのである。会うことでお互いの愛情を確認している。

しついでぬ ばなや

季節の花は

しついでんあーし さきおーる

季節ごとに咲いている

うらとうぬ いんや

貴方との縁は

いかいりどう かたみよーる

行き会ってこそ固めるのです

『とうばらーま歌集』一一五頁

次の歌は「季節の花は夜露が情だ」と「乙女の花は情で色が増さる」の二つのことがらが描かれている。「みやらびばな」と乙女が花に見立てられ、季節の花と同類のものとして示されている。花にとつての愛情は露が降ることである。それによって美しい花を咲かせることができる。それと同じように、乙女にとつての露は愛情であり、それによって「色がまさる（容姿が勝れる）」のである。

しついでぬ ばなや

季節の花には

ゆーついでんあーし なさき

夜露こそが情で

みやらび ばなや

乙女という花は

なさきしどう いる まさる

情愛でこそ色が勝れる（のである）

『とうばらーま歌集』二二八頁

次の歌も前半と後半の二つに分けられる。この「露を受けてこそ花は育つのだ」と「愛しい乙女を私の思いのままにさせてください」の二項の間には、文法的にも意味内容的にも、すぐに類似性を見出すことは難しい。だが、先にあげた「しついでぬ ばなや ゆーついでゆどう なさき みやらび ばなや なさきしどう いる まさる」で描かれているような、花と露と情との関係を前提とするとどうであろうか。「露を受けて花が育つように、乙女は愛情を受けて育つものだ。だから、愛しい乙女は私の愛情を受入れるべきなのである」と理解することができる。「我ま なしたぼり」と依頼する表現になつてはいるが、私の愛情を受け入れてほしいと強くせまる歌である。

2 露ん 受くばど

露を受ければ

花や 育だかりる

花は育つ

かぬし みやらび

愛しい乙女を

我ま なしたぼり

私の思うままにしてください

『南島歌謡大成IV八重山篇』五二八頁

79 つゆや うくばどう

露を受けてぞ

はなや すだかりる

花は育つ

かぬし みやらび
吾 まま なしたぼうり

愛し乙女は
私のままにしてください

〔南島歌謡大成IV八重山篇〕五三五頁

次の歌では植物の花ではなく、風によって生じる波のしぶきを花と見立てて描いている。「南の風は波の花を咲かせる」という自然の描写が、「愛しい乙女は（私の）心を元気づける」と並べられている。『石垣方言辞典』^八に「スラシウン ①反らす。②萎えたものを元気づかせる。③人の気分を奮い立たせる。」とある。南風が波の花を咲かせるように、愛しい乙女が私の萎えていた心を元気にするのである。

ばいぬ かじえーまあ
なんぬ ばな さかし
かぬしい みやらび
ばーきいむ すらし

南のそよ風は
波の花を咲かせ
愛しい乙女子は
私の肝を元気づけ（るのだ）

〔とうばらーま歌集〕七九頁

このトウバラーマと同様の歌がアヨーでも歌われている。『南島歌謡大成IV八重山篇』（アヨー50）には、

1 さあ ささら にしかじや
なみぬ はな すらし
うみみやらび んぞや

北風は
波の花を咲かせ
思い乙女のあなたは

ばー きむ すらし
私の心を元気づけ
とある。アヨーでは北風が波の花を「すらし」、乙女は私の心を「すらし」と同じ動詞が繰り返されている。萎れてきた花がぱっと元気に咲くように、私の心も愛しい彼女によって勢いづくのである。アヨーの場合、共通項を持つものとして両者が対比されていることが明確である。

②かぬしやま花

次の歌では、愛しい人を「かぬしやま花」と花に見立てて描いている。「愛しの花は蕾んで待っているので、情けをください、咲かすにはいられない」と相手に愛してほしいと依頼している。

『とうばらーま歌集』の歌も同様の歌詞であるが「ふくらみ まちそんが」の部分が「ふくまりい むちうりや」(蕾を持っている)となっている。

45 かぬしやま はなや

ふくらみ まちそんが

愛しの花は

ふくらみ待っているが

情ゆ 給うり

情けをください

さかなーで うらるぬ

咲かすにおれない

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五三四頁

かぬしやま ばなや

乙女子の花は

ふくまりい むち うりや

蕾を持っているから

ななきゆ たぼーり
さかなー うらるぬ

情けを下さい
咲かないでおられない(から)

『とうばらーま歌集』一二六頁)

③あら花

「花を咲かせる」「花が咲く」が自然の花の描写ではなく、人事の比喩として用いられると、それは男女の交情を表す。「あら花を咲かせる」は初めての相手との交情を表している。次の歌は「昨夜は新しい花を咲かせた」とと、「愛しい人が夢になって現れた」ことの二つのことがらが描かれている。初めての交情によって、恋しい人を夢に見るということが起こるのである。

167 ゆびがゆや

夕べの夜は

あらばな さかし

新しい花を咲かせた

かぬしやーま

愛しい人が

いみなり みられー

夢になって見えた

『南島歌謡大成IV八重山篇』五三九頁)

④情の花

次の歌でも人事の比喩として「花」が用いられている。一夜限りの交情が「二夜の情の花」「夜情の花」で表される。「二夜の情の花だが、匂いを残すので心にしっかりと留めてください」と、一夜限りの関係だが忘れないでは

しいと相手に依頼している。

124 びとうゆぬ なさきぬ

花どう やそんが

にうい ぬくさば

きいむに すみたぼり

一夜の情けの

花であるが

匂いを残すから

心に染めてください

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五三七頁

165 ゆうなさきぬはなどう

やそんが

にうい ぬくさば

きいむに すめたぼり

夜情けの花で

あるが

匂いを残せば

胸に染めてください

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五三九頁

⑤ 露と花

「露と花」は恋愛関係にある男女を表す。トゥバラーマでは「昔遊んだ露と花だ」「昔遊んだ露と花の仲」と、昔の恋を懐かしむ歌で「露と花」が歌われている。

148 むかしい あしいべーる

ちいゆとう 花 やしが

昔遊んだ

露と花だが

きゆぬ なままでいん
なさきば うむい残り

今日の今までも
情けが思い残り

『南島歌謡大成IV八重山篇』五三八頁

2 昔遊べる

花と つゆ やしが
今日ぬ なままでん
情ば 思い残し

昔遊んだ
花（私）と露（あなた）であるが
今日の今まで
情けを思い残している

『南島歌謡大成IV八重山篇』五三一頁

むかしい あさべーるい
ついゆとう ばなぬ なか
きゆうぬ なままでいん
なさきぬ うむいぬくり

昔遊んだ
露と花の仲は
今日の今までも
情が思い残って（いるわい）

『とうばらーま歌集』九八頁

露と花の関係を描いて男女の関係を表わす歌は、琉歌にも見られる。露によって花が咲く、花は露が降って匂いを増す、花が露を頼みにする、花が露を待つ、のように花と露は結びつきの強いものとして描かれ、花と露の縁

は、強く結ばれた男女の関係を表わす。トゥバラマでも、花にとって露が愛情だ、露を受けて花は育つ、と結びつきの強いものとして描かれており、「露と花」は強く結ばれた男女の関係を表している。

3 若さの花

「花」は若い盛りの頃を表わすものとしても用いられる。「花」と「若さ」を同質のものとして並べたり、「若さ花」のように若さを花と見立てて表したりする。ここで描かれている花は、自然の中にある植物の花ではなく、人間の若さを象徴するものである。

①花と若さ

次の歌は「再び花が咲けるものなら」と「再び若くなれるものなら」の二つのことがらが並列されている。「再び花が咲く」と「再び若くなる」はどちらも私の状態を表しており、意味内容的に同質のものである。文法的な意味づけも同一であり、対句形式となっている。対句形式を用いて同じ内容を反復することで「若くなれるものなら」という願いを強調して表現している。

1	またん	ばなぬ	又も花が
	さかりぬむぬ	やらば	咲けるものなら
	またん	ばがさゆ	又も若く
	ならりるむぬ	やらば	なれるものなら

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五二五頁

次の歌は「若い時こそ私たちは一緒に遊べるのだ」と「花が落ちたら思っても自由にならない」という二つのごとがらが描かれている。「自由ならぬ」は私の思うままにできないことであり、「遊べない」ということを表している。前半での「遊べる」とは対照的な内容となっている。「花が落ちる」は若さが失われること、老いることを表している。

109 若さど

若い時に

ばが まぞん 遊ばりる

私達は一緒に遊べる

花ぬ うてから

花が落ちてからは

思たてい 自由 ならぬ

思ってもままならない

『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』五三六頁

②若さ花

「若さ花」「若花」「若さる花」のように、若さを花に見立てて描いている。

次の歌では「若さ花」を「再び返り咲かせる」、二番目の歌では「取り返して咲かせる」、三番目の歌では「繰り返し咲いてみたい」と歌われている。どちらも失われてしまった若さを取り戻したいというものである。前半と後半の二項に分けられ、同質の内容を繰り返す対句形式となっている。

111 ばがしやばなぬ

若さの花が

またん かいら さかるば

またも返り咲けたら

はたちばだぬ

二十歳頃が

またん かいり みらるば

またも返り見えたら

〔南島歌謡大成IV八重山篇〕五三七頁

むとうぬ ばがさゆ

元の若さを

またん かいし みらるば

又も取り返して見られたら

ばがさばなゆ

若い花を

とうりいかいし さかし みゆーば

取り返して咲かせてみたいものだ

〔とうばらーま歌集〕一二九頁

156

むとうぬ ばがさゆ

もとの若さを

またん かいし みらるば

又も返せたら

ばがさばなば

若さの花を

くり返し 咲きみゆう

くり返し咲いてみよう

〔南島歌謡大成IV八重山篇〕五三八頁

次の歌は「若さの花をいつまでも保てたなら」と「若い色がいつまでもあつたなら」との二項からなっている。

『南島歌謡大成IV八重山篇』は「若さ色」を「若い心」としているが、「色」は視覚的に認識されるものであり、ここでは人の容姿やそぶりなどの若さを感じさせるものを表しているだろう。この歌も同質の内容を繰り返す対句形

式となつており、「いつまでも若くありたい」という願いを表現している。

113 若さる 花ぬ

いちまでん むたるば

若さ色ぬ

いつまでん ありむば

若い心が

いつまでももてたなら

若い心が

いつまでもあつたなら

〔南島歌謡大成IV八重山篇〕五三七頁

次の歌では「煙草」と「若さ花」という異質なものが、共通の動詞「止められる」によつて並べられている。煙草は葉に養分を行きわたらせるために花茎を摘み取るものである。その煙草だからこそ「止められる」のであるから、その他のものは当然「止められない」ことになるだろう。「若さ花」は「止みらりみ（止めることができようか）」と反語の意を表す疑問形で結ばれている。「煙草だからこそ茎を止められるのだ。若さの花の芯が止められるものか」と「煙草」と「若さ」を対比し描いている。

2 煙草やたど

煙草であれば

茎ぬ 止みらり

吹くのを止められる

若さ花ぬ

若さの花が

芯ぬ 止みらりみ

吹くのを止められるものか

〔南島歌謡大成IV八重山篇〕五二九頁

③老いて花咲く

次の三つの歌は、前半で「若き花が再び咲けたら」「いつも若い世の中だったら」「若い色がいつまでも保てたら」と、再び若くなりたい、いつまでも若くありたいという心が描かれ、後半で「老いて花咲く浮世であれば」と再び若い盛りの頃になりたいという心が描かれている。

112 ばがさばなぬ

ばがさばなぬ 若さの花が
またん さかるば またも咲けたら
ういてい ばな さく 老いて花咲く
うきゆ やらば 浮世ならば

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五三七頁

いついん ばがさーるい

いつも若い（ままの）

しきん やらばー

世間ならば

ういてい ばな さく

老いても花咲く

うきゆ やらばー

浮き世であつたら（よいのに）

〔とうばらーま歌集〕八〇頁

110 ばがさいるぬ

ばがさいるぬ
いちいまでいん むたるば

若い色が

いつまでももてたら

ういてい はな さく
うきゆ やらば

老いて花咲く
浮世ならば

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五三七頁

次の歌では「再び若くなれるものではない」と「老いて花は咲けない」と前半と後半で同じ内容を繰り返している。先の三つの歌が「再び若くなりたい」という願望を歌うのに対し、ここでは「再び若くなれない」という諦めのところが描かれている。

138 またん ばがさぬ

又も若く

ならりぬむぬ あらん

なれるものではない

ういていはなや

老いて花は

さかりらぬ

咲かない

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五三八頁

④花の昔

「花の昔」は華やかな昔のことであり、若い盛りの頃のことである。「年を取るほど若さを思う、花の昔を取り返してみられたなら」と若さを取り戻したいというところが描かれている。

とうしいゆ とうるふどう

年を取るほど

ばがさどう うもーり

若さこそ思われる

ばなぬ むかしいゆ
とうりいかいし みらるばー

花の昔を
取り返してみられたら（よいのに）

『とうばらーま歌集』四一頁

2 年ゆ 取る 程

若さど 思もり

年をとるほど

若い頃が思われる

花ぬ 昔ゆ

花の昔（若い頃）を

取りかいし みやむばら

取り返してみたいものだ

『南島歌謡大成IV八重山篇』五三一頁

86 年ゆ とる ふど

若さど 思うり

年を取るほど

若い時が思われる

花ぬ 昔ゆ

花の昔を

くり返し 見やむば

くり返し見てみよう

『南島歌謡大成IV八重山篇』五三五頁

⑤若い頃

次の歌でも「若さ花」が歌われている。この歌の類歌に「114 若さはだぬ かはさや いちまでん 肝に すまり

胸から うるさるぬ（若い頃の匂いはいつまでも心に染まり胸からおろせない）」（『南島歌謡大成IV八重山篇』五三七頁）がある。この若い頃を意味する「若さばだ」^九が「若さ花」と解されるようになったものである。

1 ばがさ 花ぬ

かばさや いちまでん

若い花（乙女）の
芳しさはいつまでも

きむに 染まり

心に染まり

胸から うるさるぬ

忘れられない

（『南島歌謡大成IV八重山篇』五三一頁）

次の歌では「若き花」と表記されているが、これも本来「若さばだ」であつたものが、伝承の過程で「若さ花」と解されるようになったものである。「若い頃に通つた狭い道が、今になって大きな道になっている」とすつかり変わってしまった道を見て、若い頃に通つた道を思い起こしているのである。

1 若き花に

通たる 狭路

若い時に
通つた狭道

今ば なり

今になったら

大道なりうり

大道になつており

（『南島歌謡大成IV八重山篇』五二九頁）

4 盛りの花

次の歌は「トゥバラーマ歌の内容どおりに私たちが花を咲かせた、匂いが香ばしい」というものである。この歌の「花ば咲かし」の「花」が何をあらわしているのかが分かりにくい。「みーどうり」の「みー」は見た目を意味する語¹⁴で、見た目通りに、トゥバラーマで描かれた通りに、の意であろう。だが、トゥバラーマ歌で描かれたことが恋なのか若さなのか、この歌だけでは判断できない。ただ、「匂いが香ばしい」とあることから、この花が美しく咲いて良い匂いを発している状態であることが分かる。皆で歌を歌ってそれが良い状態を生みだしているということだろうか。玉城政美は「トゥバラーマ歌の内容どおりに私達で花を咲かせた、匂いが香ばしい、と歌を賛美している。」¹⁵とトゥバラーマを賛美する歌としている。

92 とうばりやーまうたぬ

トゥバリヤーマ歌が

みーどうり

内容どおり

ばんだーし はなば 咲かし

私達で花を咲かせ

にういぬ かばさ

匂いが香ばしい

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五三六頁

次の歌では前半に「梯梧の花さえ初夏の若夏を思い出して咲き盛るよ」と自然が描かれ、後半で「人に生まれて死んでそのままなのだね」と人事が描かれている。初夏になるとまた花が咲いて盛りを迎える梯梧と、死んだらそのままである人間とが対比されている。

1 あかようらぬ はなざぎ

デイゴの花さえも

むじつこい	
うるじいんぬ	初夏の若夏を
うむいだし	思い出し咲き盛るさ
ひとうな	人と生まれて
しいにて	死んでそのままだね
うぬまら	

〔南島歌謡大成Ⅳ八重山篇〕五二五頁

本研究は JSPS 科研費 JP15K02218 の助成を受けたものです。

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP15K02218.

注

トウバラマは本来三線の伴奏を伴わずに、野外で歌われる歌である。狩俣恵一は「トウバラマは浜辺や労働や船中や道中や宴席など、さまざまな〈場〉でうたわれており、その場によって家トウバラマ・野トウバラマ・道トウバラマなどと呼ばれることもある」〔南島歌謡の研究〕一九九九年 瑞木書房）と述べている。大田静男は「石垣のとうばらーま節の歌い方には、①昔とうばらーま②家とうばらーま③野とうばらーま④道とうばらーま⑤ぱっかりとうばらーま、がある」〔とうばらーまの世界〕二〇一二年 南山舎）と述べている。歌われる場の違いだけでなく、歌い方も異なっていたようである。

二 石垣信知は歌を歌うときに気をつけていることとして「白保には白保ブリヨウ（節回し）があるし、石垣ブリヨウ、川平ブリヨウとそれぞれの歌い方があります。登野城のマフタネーは白保ブリヨウといっしょで「仲筋カヌシャマ」のころをグリーンと上げる。石垣はそこを低く歌いますね。川平は「ナカドウ道から……」と最初から上げて歌う。」と述べている（大田静男『とうばらーまの世界』二〇二頁）。

三 玉城政美はトゥバラーマの詩形について「対句を継起的にかさねる構造がその連続性を失い、宮古諸島のトーガニと同様に、一節の独立を獲得することによって、現在ふつうに創造されるトゥバラーマが成立するのであろう」とし、一対句で構成されているトゥバラーマを「ひろいだすのは容易であり、また、このことからトゥバラーマの詩形が対句連続構造からの分化・独立によって成立したことを推測させる」と述べている（『南島歌謡論』砂子屋書房 一九九一年）。

四 池宮正治は「トゥバルマもシヨンガネも、音数律の面から言えば、これも不定形である。ただ四句体になっている点が注目される」と述べている（『琉球文学論の方法』一九八二年 三一書房）。

五 外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』（一九七九年 角川書店）。

六 『とうばらーま歌集』は「とうばらーま歌集」編集委員会の編集で一九八六年に発行されているが、本稿では一九九九年に再版されたものを用いた。

七 玉城政美「トゥバラーマ（雑歌）の構造と主題」『琉球歌謡論』（二〇一〇年 砂子屋書房）三九四頁。

八 宮城信男『石垣方言辞典』（二〇〇三年 沖縄タイムス社）。

九 『石垣方言辞典』には「バダ ころ。時。節。時代。アサビウバダ（遊びに夢中になる若いころ）。ヤマンガバダ（いたずら盛りの時代）。ムヌウムイバダ（物思いの節、思春期）」とある。

十 『石垣方言辞典』に「ミー 見かけ。見た目。」とある。『南島歌謡大成』では「内容」と訳しているが、『石垣方言辞典』に

はその解釈に合う語は見られない。
二 『琉球歌謡論』四二四頁。